# 遷延性・慢性咳嗽における胃食道逆流症（GERD）の頻度，影響に関する検討

市川　博也，金光　禎寛，土方　寿聡，武田　典久，
福光　研介，浅野　貴光，竹村　昌也，新実　彰男
名古屋市立大学大学院医学研究科 呼吸器・免疫アレルギー内科学

【背景】胃食道逆流症（GERD）は，欧米では遷延性・慢性咳嗽の原因として高頻度だがアジアでは少ない。胃食道運動不全は遷延性・慢性咳嗽の病態生理に関与するが，咳への影響に関する報告は乏しい。
【目的】遷延性・慢性咳嗽におけるGERDの頻度，影響を検討する
【対象と方法】対象は2012年4月から2016年5月までに当院喘息・慢性咳嗽外来で治療後診断を行った非喫煙，遷延性･慢性咳嗽患者220名（女性149名，平均51歳）。GERD症状，咳関連QoLはFスケール質問票（FSSG），Leicester咳問診票日本語版（J-LCQ）で評価した。
【結果】遷延性・慢性咳嗽の原因疾患として咳喘息（CVA）が最多で（n＝74），次いでGERD（n＝27）が多かった。71名が複数疾患を持ち，このうち62名でGERDを合併していた。CVA＋GERD患者（n＝52）はCVA患者に比べ有意にFSSGスコア高値，J-LCQ低値，咳消失までの期間が長期であった。また，運動不全症状のみ呈するCVA＋GERD患者（n＝12）はCVA患者に比べ有意に咳消失期間が延長し，消化管運動賦活剤の追加で咳消失期間は短縮された。
【結語】GERDは本邦において遷延性・慢性咳嗽の原因疾患として頻度が高く，他疾患との合併が多い。胃食道運動不全は咳の難治化に関与している。

【キーワード】遷延性・慢性咳嗽，胃食道逆流症，胃食道運動不全，消化管運動賦活剤